

Tableauを データ活用基盤にすることで 「データを見る人」が増大

ハイブリッド型CoEと3ステップの取り組みで自由分析の定着へ

2日

簡単なダッシュボードであれば、
データソースからのデータ取得も含めて
2日で作成可能

約10倍

グラフを多用したダッシュボードによって、
あるデータに関しては、日常的に見る人
の数が以前の約10倍に

株式会社アダストリア

<https://www.adastria.co.jp/>

A D A S T R I A
—
Play fashion!

業 種：ファッション

従業員数：正社員6,196名

(2022年2月末時点、グループ合算)

資本金：26億6,000万円

所在地：〒150-8510

東京都渋谷区渋谷2丁目21番1号
渋谷ヒカリエ 27F

事業内容：ショッピングセンターを中心に展開するカジュアルファッション専門店チェーン。「Play fashion!」をミッションに掲げ、「GLOBAL WORK」や「niko and...」「LOWRYS FARM」など、30を超えるブランドを国内外に約1,400店舗展開している。また最近ではアパレルの枠を超え、食や住環境などのマルチカテゴリーの商品も展開。お客様一人ひとりの毎日に「もっと楽しい」選択肢を提案している。

導入前の課題

レガシーシステムの乱立でデータ活用が困難

複数の会社が合併して現在の形になったということもあり、複数のレガシーシステムが乱立し、データ活用が困難だった。実際にデータを活用している部門でも、Excelツールが乱立していた。

解決策

ハイブリッド型CoEを設置し3ステップでTableauの定着へ

データプラットフォームを統一し、セルフBIの基盤としてTableauを採用。3ステップの取り組みによってTableauを定着させ、最終的に自由分析が行われる環境を目指している。

導入後の効果

データを見る人が以前に比べて飛躍的に増大

グラフィカルなダッシュボードによって、データを見る人の数が以前に比べて飛躍的に増大。あるダッシュボードでは、以前の同等のレポートに比べて、見る人の数が約10倍になっている。

選定理由

セルフBIに最適な基盤だと評価

Tableauは操作がわかりやすく、グラフやビジュアルを盛り込んだダッシュボードの作成も簡単。ITリテラシーが高くない人でも、自分が求めるレポートを自分の手で作成できると評価された。

導入時期：2021年10月

導入製品：Creator：10 Explorer：10 Viewer：約2,000

主な利用環境：セルフBIによる各ブランドのデータ活用推進

導入に要した期間：約3か月



お客様プロフィール

お名前：甲斐 裕樹 様

役職：シニアマネージャー

部門名：DX戦略部

主な担当業務：

データ活用チームのリーダーとして、BI/帳票によるデータ可視化やデータ分析領域をリード。

導入の背景

レガシーシステムの乱立でデータ活用が困難

「Play fashion!」をミッションに掲げ、30を超えるファッションブランドを展開する株式会社アダストリア。「マルチブランド、マルチカテゴリーの商品の提供」「デジタルの顧客接点、サービスの拡充」「グローバルな事業展開」「新規事業、飲食業など新たな魅力の獲得」という4つの戦略を掲げ、現在も成長を続けています。このうちデジタル領域におけるデータ活用は、成長を支える基盤として、店舗開発に次いで重視されています。

「データ活用で目指しているのは、ユーザードリブンかつデータドリブンの組織を実現することです」と語るのは、DX戦略部でシニアマネージャーを務める甲斐 裕樹 氏。ユーザー部門が能動的に必要なデータにアクセスし、データをもとに課題を発見すると共に、自らアクションを起こして課題解決まで行えるようにすることが、最終的な到達点なのだと言います。

しかし以前はそのための環境が整っていなかったと甲斐氏。ア

ダストリアは複数の会社が合併して現在の形になったということもあり、複数のレガシーシステムが乱立しており、ブランドやユーザーによって見られるデータがバラバラだったのだと言います。そのため加速するビジネスの変化に対応できるデータ活用が、なかなか実現できなかったのです。

「実際にデータを活用している部門でも、Excelツールが乱立しており、個人のスキルに依存している状況でした。また手作業による分析作業が多いことも、大きな問題になっていました」。

Tableau 導入・運用環境

ハイブリッド型 CoE を設置し3ステップで Tableau の定着へ

この問題を解決するため、まずはデータプラットフォームを統一。欲しいデータの所在がわかりやすい状態を作り上げました。さらにセルフBIの基盤としてはTableauを採用。ユーザーが自ら自発的にデータを活用できる環境も整備していきます。

Tableauを導入したのは2021年10月。しかし「ツールを導入

Q1. Tableau で感動したことは？

A1. グラフ間連動の簡単さ

「自分でダッシュボードを作った際に、グラフが簡単に表示され、グラフ間のフィルター連動も簡単に設定できることに感動しました」

Q2. Tableau 導入後の変化は？

A2. データをどう可視化すべきか意識するようになった

「以前の会社ではユーザーとしてBIを使っていたのですが、グラフで見せるといったことはやっていませんでした。いまでは何をグラフ化すればわかりやすいのか、見せるべきポイントは何なのかを考えるようになっています」

「ただけでは利活用は進まない」と判断、利活用を推進する体制を確立するためCoE（Center of Excellence）の設置を予定しています。このCoEの大きな特徴は、**全社レベルと部門レベルのハイブリッド型の組織**になっていること。全社CoEは全社横串でのデータ活用をリードしてノウハウを蓄積するとともにデータの品質を担保、部門レベルのCoEはブランドごとに設置され、各ブランドでのデータ活用の取りまとめや、コミュニティ形成、ベストプラクティスの共有などを担っていく予定です。

Tableauの定着は、3ステップで段階的に推進していく計画です。

ステップ1は「データを見る＝Tableau」という考え方の定着です。そのために既存システムのデータ提供機能をTableauに移管し、既存システムを停止することで、Tableauでなければデータ活用を行えない状況にしています。

ステップ2はデータ可視化の定着です。アダストリアでは数字の羅列になりがちなクロスレポートを長年にわたって使い続けてきましたが、現在ではTableauによるグラフを多用したダッシュボードの利用を広げつつあります。

そしてステップ3が、自由分析の定着です。これに関しては現在パイロット運用が行われており、自由分析を阻害する課題の洗い出しが進められています。

Tableau 選定の理由

セルフBIに最適な基盤だと評価

アダストリアがデータ活用基盤としてTableauを採用した理由は、

セルフBIに最適だと評価されたからです。

「Tableauは操作がわかりやすく、グラフやビジュアルを盛り込んだダッシュボードの作成も簡単です。またグラフのデザインも洗練されており、データ群のどこを見るべきか、そこからどのようなポイントを把握すべきかなどを、見る人に伝えやすくなっています」（甲斐氏）。

また用意されている機能やグラフの種類が多く、これらを試しながら最適な表現を探っていく、という作業が行いやすいことも、大きなメリットだと指摘します。実際に甲斐氏自身も、ダッシュボード作成を始めた頃は、このような試行錯誤を行いながらダッシュボードを完成させていったと振り返ります。

「これならITリテラシーが高くない人でも、自分が求めるレポートを自分の手で作成できます。IT部門だけではなくビジネス部門の人でも、自発的に活用できると判断しました」（甲斐氏）。

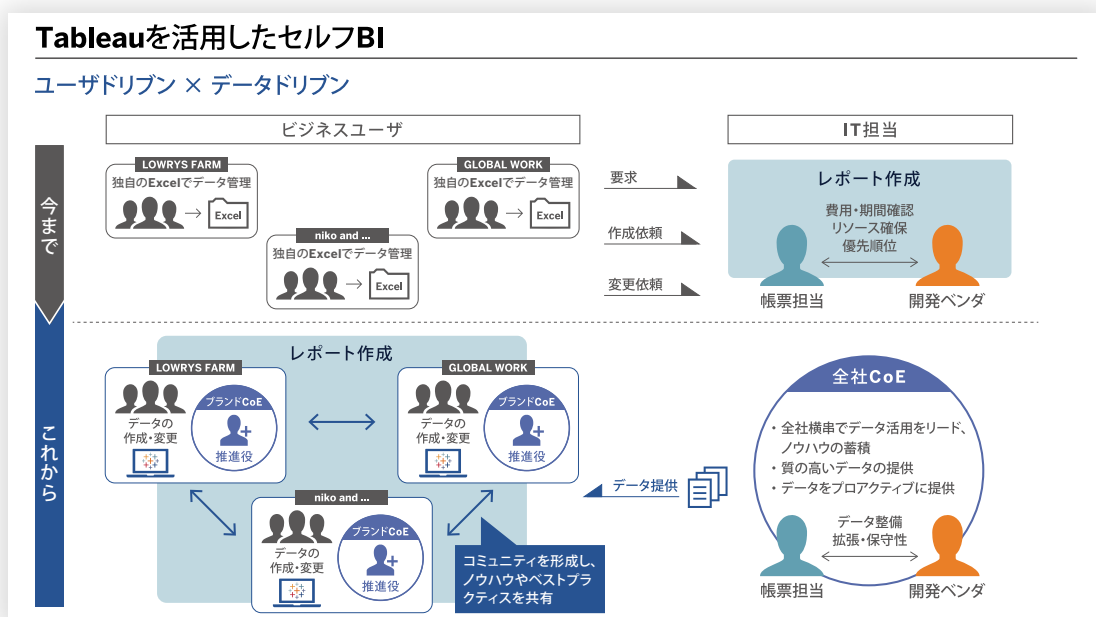
Tableau 導入効果

データを見る人が以前に比べて飛躍的に増大

Tableauをデータ活用の基盤とすることで、すでに次のような効果が得られています。

データを見る人の裾野が拡大

現在はステップ2を進めている段階ですが、グラフを多用したわかりやすいダッシュボードによって、データを見る人が増大しています。数字の羅列に強くない人でも、Tableauのダッシュボードであれば直感的に内容を把握できるからです。以前



はどれだけの人がExcelのレポートを見ていたのかわかっていませんが、Tableauにレポートを移行した後は、本部だけで700~800人が日常的にTableauにアクセス。国内1,300店舗の店長へも利用者が拡大しつつあります。

閲覧者が約10倍になったデータも

よく見られているダッシュボードの代表が「STAFF BOARD」に関するものです。STAFF BOARDとは、アダストリアが運営するECサイトの1機能であり、ショップスタッフがリアルなスタリングを提案するというもの。このダッシュボードでは、ECサイト全体の売上推移だけではなく、ブランドや店舗ごとの売上、どのスタッフの提案が売上にどれだけ貢献しているかまで、ドリルダウンして見られるようになっています。

「STAFF BOARDのレポートは、以前は数名しか見ていませんでしたが、今では毎週30~40人が見えています。これだけでもデータを見る人が、以前の10倍になっていることがわかります」(甲斐氏)。

ダッシュボードの開発も効率的

現在はまだ主にDX戦略部(IT部門)がダッシュボードを作成していますが、開発効率が高いことも大きなメリットになっています。

「簡単なダッシュボードなら、データソースからのデータ取得も含めて、2日もあればダッシュボードを作成できます。また作

成したダッシュボードをユーザーに見てもらって修正するといったことも、アジャイル型で進めることが容易です」。

今後の展開について

データ活用領域を拡大しながら自由分析の定着へ

今後はTableauによるデータ活用の領域を、段階的に拡大していく計画です。

「まず着手する予定になっているのが、店舗の実績を振り返るダッシュボードの作成です。これまではこのようなレポートがありませんでしたが、実績を可視化できれば業務効率アップにつながるはず」(甲斐氏)。

また物流・生産領域も、以前はデータそのものが取得できませんでした。プラットフォームを統合することでデータ取得が可能になっています。ここで蓄積されたデータも、今後は分析対象にしていく計画です。

もちろんこれと並行して、Tableau定着のステップ3である「自由分析の定着も進められています」。

「2022年後半から2023年にかけて、Explorerの権限をユーザーに展開していきます。またユーザートレーニングやCoEの活動も、これまで以上に本格化していきたいと考えています」(甲斐氏)。



無料トライアル版をダウンロードして、ぜひ Tableau をお試しください。

<http://www.tableau.com/ja-jp/trial>

株式会社セールスフォース・ジャパン Tableau